祚の衰頽極まれり、いかに其の御血脈は儼在し給ふにもせよ　天祖在天の神靈豈之を懌ひ思召さむや、思ふてこゝに至る、天下の仁人志士、誰れか悚然として懼れ、慘然として悲まさる者あらむや、夫れ既に天地開闢以來萬世一系の帝祚あれは、必らす正に御手に天地萬物を主宰するの大權を執らせ給ふへし、是れ至正至當の理勢にして、若し一物も之を主宰し給ふ大權を失ひ給ふ時は、即ち是れ我か寶祚之隆を虧損するの時なり、

布教通信

西征之歸途　（雁信）

（前略）韓京滯在中の模樣は曩きに禿筆を呵して御報申上置候處御一笑被下候事と遙察致候爾後長崎より當地迄のあらまし左に書綴り可申候間御判讀被下度候

旅館福島屋に始めて旅裝を解き滯ること二日同市西中町藤岡方へ轉宿致候こは舊實行教同志の家にて或人の紹介なるか諸事好都合に有之候、一日海軍大尉香月輝彦氏來訪せられ過る黃海、威海衞の役より快談縱橫、翌日を期して相別れ申候、翌日管長と共に寄港中の軍艦八重山に同氏を訪申候、氏は乃ち各將校室、機關室を始め魚形水雷、機關速射砲の裝置及ひ運轉發射の式に至る迄隈なく案内説明の勞を執られ、茶菓の饗應を受け歸宿致候、今や大尉を乘せたる八重山は臺灣基隆港邊に烈暑極熱の勁敵と接戰致し居るなるへく曩きには朔北の祁寒に打勝ち今又た斯の如し、帝國軍隊の勞苦想察に堪え申候

加藤倉本原田圓城寺等の舊社員其間に斡旋して歸朝の祝宴を兼ね布教上の協議小集を相催し申候、教師矢野孫策氏も來會し席定まるや小生一應の挨拶をなし次に管長の懇篤周到なる説教有之一同感激奮發の模樣にて夫れより清酌の中に舊好を温め今後を圖り茲に教會所設立の議起り終に矢野氏をして之れか設計運動の任に當らしむる事と相成り其日は散會仕り候床上掲くる所の道祖を始め五代八代の諸神靈、地下にて御滿悅の事ならむと想ひ奉るも畏こく覺え候、

藤岡に在ること十日許りにして教會の計畫畧ぼ成り、適當の塲所を見出す迄とて先つ同市八百屋町に一家を求め假事務所として猶ほも運動すへき旨矢野氏の來り談するに依り乃ち其處に移り申候、諏訪神社玉園山下

にして風清く松に聲あるの所至極旅情を慰め候ものも多々有之候、是より先き管長の舊友田口忠德氏（小城人）に出會ひ候が氏の家恰かも八百屋町に有しを以て往復無聊を慰し申候氏は亦た熱心に教會設立に關し盡力する處あり其他諸方より來て此舉を贊し此事を助くるもの甚た多く矢野氏も大いに力を得て盡瘁怠らす、爲めに着々運動の歩を進め、今は既に會則願書の草案も出來、唯た茲に一の適當なる教會擔任教師を欠くを憾みと致し居候處恰も好し、島原町に在つて多年神道擴張に盡力しつゝありし權少教正村上高世氏の來り會するあり直ちに贊成承諾の上其筋に出願するとと相成り待つ間あらせす越えて翌々日許可せらるゝ旨の辭令下り、先つは教會開きの準備とり〳〵、長崎に本教直轄神道惠美須教會本部の結集を見るに及ひ申候、

この惠義須教會組織に就ては深き因緣有之候、そは前管長か嘗て九州御巡教の折大隅國にて始めて惠美壽の圖を見、從來事代主神或は蛭子など申傳へ候も共に據なく種々考證の末男女二柱の御神躰即ち穗々出見命豐玉姫なることを立證し一文を草して諸家に正されしに何れも同感せられし事嘗て惟一誌上にも掲載致し候が其後現管長か何時か一教會を組織して本邦の如き四面海に瀕せる人民に和田津海の奇しき御神德を仰かしめ兼て先師の遺志をも紹がんと覺され候を茲度信徒の請にまかせ先つ長崎に開教する事と相成申候、茲時六月十八日盛んなる教會所開きの祭典を執行仕候門前には新調の國旗提灯型の如く、正面の大床に神籬を立て神鏡神影を齋き御幣供物賑はしく定刻人集りて祭官一同着席管長親から祭主となり、祝祠を奏され式畢りて更らに管長は一場の説教あり門前に通行人の足を留むるもの非常に多く熱心に傾聽し畢りて教長教師信徒總代以下順次神酒をいたゝき愛度散會を告けしは夜已に闌の頃に有之候ひし、

十代の尊師か惠美須大神の微笑し玉へる御圖に題して

おもほしのまに〳〵なりし神のおも
ほゝゑみすとやたゝへまつりし

と在りしを更らに確めて管長左の如く

ほゝゑます神の幸へ祈りなは
なみのよるひる惠みますらむ

と御神影に題して與へられ候、小生も請はるゝ儘に左の如きものを綴りて教長矢野氏に贈り申候

おもほしの
まに〳〵なりし神の面　ほゝゑますとや稱へけむ

そも〳〵惠美須大神なる
あるは蛭子さたゝゆるは
まことぞ女男の二柱
わだの潮路をこゑたまひ
豐玉姫にめぐりあひ
滿足らひたる喜び
そのおん影を寫してぞ
あるは事代主さいひ
皆なあやまりの傳へにて
男神は日子穗々手見神
滿干の玉を捧げもつ
うせにし鉤も得たまひて
おもにあらはれほゝゑます
惠美須神とは申すなり
御前拜かみ一向に
家内安けく懲業の
まに〳〵なるぞ尊とけれ
たふとけれ

されば〳〵まことの心もて
神の幸祈りなは
道も開けておもほしの
爾後皆々布教に盡力被致候筈にて來年に及ひ候はゝ今一度管長の御巡教を仰きたしと申居り候か、矢野氏の熱心なる村上氏の篤實なる其他諸氏の忠誠なる、教會の盛況期して竢つへく、强ち鬼の笑ふへき事にも有之間敷又た今日の世の中惡鬼羅刹も御神德を以て微笑ますこと出來候はゝ中々に面白き事に可有之候

遂東還附の事に就て世間何となく物騷敷折柄、內務省訓令第九號教師檢定試驗法の事本館よりの郵報に接し候が隨分長崎邊にても狼狽致すお蔭の先生方も見受申候

長崎は道祖長谷川角行靈神の御降誕地にて先年十代の尊師か當地御布教の折も種々御遺跡を取調へられたるか十八歳の御時、天下の大亂を理めむとて全國を御徧歷在せられて今は御跡も有や無や長谷川の姓なきにあらねと僅かに其姓を名乘れる迄にて更らに分明なる能はす今はそれとて神戶邊へ轉籍して其地にあらす、無理ならぬ事とは申しなから我ら其流を汲んて清き正しき御教を奉するものゝ惜しみてもなほ惜しむへき事に御坐候小生は一日原田某を伴ひ禪寺春德寺に道祖の御神靈を吊らはんとて出懸申候寺僧に就て御墓所を問へとも分らす、墓守を拉して漸く長谷川氏代々の墓地に參り彼れか此れかと索むれとも得す、兎角する中師翁か嘗て調へられたる文字見えわかぬ石塔二ッ漸くにしてたづね當て申候、是れぞ誠とに「角の藏」と唱へし道祖の御墳墓、名も知れぬ草は縱横に生ひ茂り掃ひもやらぬ青苔に碑石を包みて哀れ一層深く小生は四方を掃ひ跪いて默禱すること良久しく、坐ろに感愴の胸を衝き暗涙の瞼を濕すもの頻りに有之猶ほ千載の下靈神か高德は赫奕として本教の光輝となり澆季の浮世を照し玉はむことを念しつゝ悄然として歸宿仕り候殊に本年は道祖か二百五十年祭に相當致し料らす詣て奉れるは最と畏こく獨り喜ひに堪えす候

此月十六、七の兩日長崎市民の凱旋祝賀會有之市中は

殆んと狂せる計りの賑はひにて種々奉納餘興なと有りし中にも紅裙の一隊か雪白の洋裝にて赤十字社看護婦となり蓮歩を全街に運へるか如き鳥渡思付に可有之、供物の中にて菓子製の大鯛、目の下一間半に餘るもの有之隨分見事に候ひしか、初め供付の折數多の人夫か惠美壽教會所の門前に暫らく息を休めたるか其日恰かも祭典の前日にて神前飾りの準備中なりしかば皆々面白き瑞相なりなど打興し候も可笑く覺え候、

此日防州富海なる舊同氣の去る一月より旅順金州邊に在つて近頃歸朝せる人兩人に邂逅いたし互に奇遇を感し猶ほ教會の事に就ても應分の助力をなすよし誓はれ申候

此頃長崎に宗教革命軍大演說といふ張札有之何事ならむと存候處日蓮宗の俗僧日種某の獨演說にて二日間徹頭徹尾眞宗攻擊の演說を致し候とかにて眞宗信者の激昂甚たしく演說妨害の壯士なとも現はれ果は警官の厄介を煩はす醜態を極め猶ほ盛むに醜論有之候由、由來犬と猿との間柄なる兩宗の爭論を罪も無き聽衆よりは木戸錢を貪ほつて覥然たる宗教家も世には有之候かと思へはヒタと呆れ果申候是等迄も世には佛教家は熱心なるものと申す人も可有之哉小生には頓と相分らす候

長崎滯在中は殆んと連日の霖雨にて隨分無聊にも有之小生は脚氣病を惹起し困難仕候扨て教會所も漸く設立の運ひに相成事務亦た輙や其緒に就き候儘豫て佐賀市宮地嶽教會長渡邊繁雄氏より招待の約有りしを以て種々の打合せも致し愈々出發の事に決し候處佐賀より新築の神殿落成の期及農家挿秧の期節とて一週日の延期を請ひ來り候間少らく出發を見合せ去る七月三日の拂曉村上矢野等の數氏に送られ茲に長崎を打立ち申候時津より船にて彼杵と申す處に到り人車を僦ふて嬉野に着せしは早や夕景に有之候佐賀乘込の期日に未た數日を剩すを以て此處に二泊し夫れより順路武雄に赴き三國屋と申すに投宿致し猶ほ兩三泊仕候武雄は九州有名の湯泉場にて種々の古蹟も有之佐賀より鐵道の通するありて浴客四時絶えさるよし舊武雄老公昵近の祈禱師東江某日々訪問し來り何與となく世話致し呉れ候佐賀よりも渡邊氏其他數名の來り迎ふるあり七日午前十時滊車にて佐賀に赴き申候曩きにも御報申上候通り當日は非常の歡迎にて列車の停車場に着するや數發の烟火は轟然として天に冲り出迎人無慮二百餘名、一樣の教標を胸邊に掛け大小の旗幾旒となく押立て萬歲の聲鳴り渡り候暫時休憩の中も爭ふて刺を通し來るもの甚

た多く頓て數十の腕車を連ねて水ヶ江町宮地岳本部に着し階上に休憩須臾にして直ちに祝祭の執行あり管長は祭服にて教場に進まれ一場の挨拶拍手の裡に畢り其日は夫れにて散會し翌八日より二日間本部に於て公開の説教相催し申候西川大教正小城より來會せられ盛會に有之候小生は九日より腸加答兒に罹り渡邊氏方にて療養致し居り管長には十日郷里小城に參られ香月則之氏方へ滯在被致申候十四日稍〻輕快に相成候間小生も小城に參り香月氏へ宿泊前夜より中町にて説教有之中々の盛會にて皆々熱心に傾聽致し候爰に奇縁とも申すへきは會場となせし黒住教會所は素と扇屋と申す旅店にて十代の尊師が十八歳の折始めて岡田勇行師に道を聞きて感奮致され候處なりしと申す事に候

管長佐賀に入りし折

雨露にぬれしこまの〻旅衣
　きてふるさとの錦とやせむ

小城に入りて昔の樣のいたく變りたるを

浦島かむかしかたりを忍ふまて
　わかふるさとはかはりぬるかな

櫻岡公園にて

變りゆく世にも昔を春ことに
　さくらか岡の花やしのへる

など口咏まれ申候

兎に角久振の歸郷の事とて新聞にて或は聞傳へて訪問し來るもの陸續揮毫を乞ふもの亦た山の如く應接遑あらさる位に有之一夕舊友五六祇園社枕流亭にて管長の爲めに賀筵を聞かれ席上各々書畫の揮毫あり瀟洒なる清酌如何に俗塵を洗ひ去りしやは小生病床に在て想察いたし居候儀に御座候、

廿日病稍〻癒え小城を辭して又た佐賀に歸り居ること三日、廿三日午前八時九鐵二番列車に乘して東上の途に上り申候渡邊氏部下信徒、香月氏夫妻其他諸子の見送らるゝもの數十名、滊笛一聲煤烟を殘して滊車は進行し始め午後一時といふに門司に着仕候偶〻廣島行滊船の直ちに出帆するを聞き倉皇手續を了して乘込み申候、三時門司港を發し周防の灘宮島の景も夢に過きて翌曉宇品に着し直ちに人車を僦ふて一里廣島停車場傍溝口に投し申候、

船中にて管長は靈夢を見「死ぬ、急げ」などの言葉判然耳に入ると覺えて心地勝れす、廣島に着してなほ氣も坐ろ、昨來の疲勞も忘れて又た直ちに神戸行二番列車に乘込み其日の午後七時神戸へ安着山村と申す旅館

へ投宿致し候處大風大雨荐りにして殆んと安眠を得す、翌朝之を聞けは昨夜軍夫及ひ病兵の多くを乘せたる列車の大半風雨の爲めに顚覆し剩さへ海中に突入り生死未た分明ならすと申す事何等の災害ぞ、さるにても一夕の靈夢徹つせば夫れ或は危難に近つけるやも計り難く只管神明の加護の難有を感し、坐ろ欽仰の念を加へ御恩禮申上候

翌廿五日大坂萱萱氏に到り一泊仕候此夜醫同氣の來訪するもの四五、小生三歳何ヶ月の折或は抱き或は負ひなとせし人々なるよしなれとも確と覺え不申何となうら耻かしき心地致し候、翌日午前十時發濕車にて管長は參州豐橋へ立越られ神戸氏に一泊被致小生は京都博覽會に叔父納富氏を訪はむとて一人車を降り尋ねし處早や歸國せられし由にて已むなく博覽會なと見物いたし其夜の濕車にて翌曉豐橋に着し神戸氏に管長と會し又た直ちに駿河藤枝に向ひ申候、

濕車の藤枝停車場に着するや伊東、落合外數氏の出迎あり、直ちに本教分院に臻れは教長櫻井翁先づあり翌日を期して歡迎慰勞の會を催すことに決し其夜は僅かに疲勞を休むる事といたし申候、蓋し斯の如く道途を急き候は早や富士登山の期日切迫したるか故に有之候

翌日と相成候へは早朝より來會者引も切らす定刻午後一時に至れは場内立錐の地も無之頓て伊東禎三氏起て開會の趣旨を述べられ次に當地神官總代某氏歡迎の祝辭あり夫れより小生一場の演說を試み次に櫻井教長の講話畢りて管長の朝鮮經歷談より進むて懇篤なる說示あり喝采拍手の間に閉會し御恩禮の後、席を更ためて祝盃を擧くる事と相成り配膳に對へるもの無慮百五十餘名、散會を告けしは早や夕陽西山に呑く頃ほひに有之候

翌廿九日懇切なる招聘に任せ雨を衝いて大覺寺村堀田氏方に赴むき夜講を開會し一泊仕候此日東京より小生末妹の病氣危篤なるよし電音有之已むを得す明卅日一番濕車にて小生のみ歸京可致事と相成り申候管長は是より靜岡江尻を經て同氣と共に富士御登山を畢へ歸京可被致筈に有之候先は取急ぎ候儘亂筆御用捨被下度候

早々

猶ほ讀者諸君へは宜敷御吹聽被下度候

七月末日　　田中座外拜

惟一社御中